

## 第四章 戦国時代の豊前国

### 一 大友義鎮の豊前入国

大友晴英の

大内義隆は、長年嗣子に恵まれず、土佐一条家に嫁した姉の三歳の子を養子に迎え、出雲富

大内家襲封

田月山城攻囲に同行し、天文十二年（一五四三）、敗軍して舟で帰国する際、はしけが傾き

沈没したために水死した。その後、豊後の大友義鎮たしげの弟晴英はるまが、大内義隆の姉の子であるという関係で、猶子とし、やがて嗣子とする約束ができた。しかし天文十四年、義隆の側室に義尊が生まれたため、この話は解消となった。

陶隆房は、天文二十年（一五五二）、挙兵するにあたって、義隆を廃し、義尊を擁立するか、兩人を殺害して大友晴英を迎立するかを家臣たちに諮り、晴英迎立の評議に隆房も同意して、使節麻生弥五郎を豊後に遣わし、晴英の同意を取り付け、杉重矩しげのり・内藤興盛・毛利元就の支持を得て、義隆・義尊父子を滅ぼした。

晴英の渡海について、兄大友義鎮は反対したという。理由は、君臣の道に背いた人たちによって、大内家督の座に就けられても永続するはずがないというものであった。晴英は「武将の家に生まれたからには、一

度は家督の座に就いてみたい。たとい将来どうなろうとも、後の苦勞は厭わな  
と強く希望して、兄を同意させたという（『小寺文書』）。

天文二十一年（一五五二）三月、大友晴英は迎えの隆房らの船で、防府多々良浜  
に上陸し、山口に入って大内氏を継ぎ、名を大内義長と改めた。

大内義長は、入国するまでの半年間に陶晴賢（隆房の名を忌み、將軍義晴の一字をい  
ただいて、晴賢と称したらしい）が与えた安堵状を追認し、「大内義隆の安堵状の旨に  
任せて」当知行を安堵していった。

杉伯耆守重 天文二十一年十月、陶晴賢は、豊前守護代杉重矩（重清）を逆賊の  
矩の誅伐 汚名を着せて自殺せしめた。杉重矩が、以前から晴賢のことを讒言

していたことが判明し、そのため晴賢が主人殺しの誇りを受けるに至ったと、その  
責任を杉重矩に転嫁したのである。

天文二十二年十月、吉見正頼が石見国津和野三本松城に挙兵し、長期戦となった。吉見氏は石見国の有力  
国人で、応仁の乱後、吉見信頼が陶弘護と対立して、殿中で刃傷に及び、双方切り死にする事件があつて以  
来、陶氏とは相いれない関係にあり、また大内義隆の姉を吉見正頼が妻としていることから、陶晴賢の反  
逆を憎んでいた。

安芸の土豪毛利元就も一度は陶晴賢の叛逆に加担したが、やがて、晴賢の悪逆を喧伝し、吉見正頼とも通  
謀して、安芸国の篡奪をねらった。



杉重矩の花押



大内義長の花押

### 陶晴賢の滅亡

天文二十三年（一五五四）五月、陶晴賢が吉見討伐に熱中しているすきに、毛利元就は、家臣小寺元武を豊後に派遣して、若い新領主大友義鎮に働きかけて、大友・毛利両家が、先祖の中原親能と大江広元がともに中原広季を養父とする兄弟の關係にあることを縁として連合し、毛利氏が主家大内氏の仇を討つと称して、周防・長門両国を自由に支配し、大友義鎮が豊前・筑前を支配するといふ密約を成立させて挙兵に踏み切った。大内義長・陶晴賢は吉見正頼と講和して、毛利元就討伐に傾注することにした。

弘治元年（一五五五）九月、陶晴賢は厳島へ渡り、毛利方の宮尾城を攻撃しようとした。十月朔日未明、毛利元就・隆元父子に急襲されて、島の西端へ追い詰められて自殺した。まだ三十五歳の働き盛りであった。



杉重輔の花押

その七日後、晴賢の子長房も、富田若山城を豊前守護代杉重輔らに攻められて滅んだ。杉重輔は父重矩の仇を討ったのである。ところが、杉伯耆守重輔も翌弘治二年三月二日、長門守護代内藤隆世に、山口の屋敷を攻められて滅んだ。内藤隆世は陶長房の母の弟であった。

このときの合戦で山口市街は灰燼に帰した。杉氏のこの一連の動きは、毛利元就の調略を受けて、大内義長・内藤隆世に疑惑を持たれたらしい。

### 大内義長の滅亡

こうして、大内義長方はしだいに衰退し、弘治三年（一五五七）三月には、毛利勢の接近によって、内藤隆世は大内義長を奉じて山口高嶺城に入ったが、備え不十分とみて、長門国且山城（下関市）へ移り籠城した。毛利方は計略を用いて内藤隆世を切腹させ、長福寺に入った大内

義長に死を迫って、大内家を滅亡させた。

**大友義鎮の** 陶晴賢滅亡後の大内義長は、内藤隆世、小原安芸守隆言、吉田若狭守興種、波多野大和守興

**豊前侵入**

滋、仁保隆慰ら防長の国人とともに防戦に努めたが、毛利元就の調略と力攻めの両面作戦に

よって一年半後に滅び去った。この間、筑前・豊前では、秋月文種・野仲重兼・山田隆朝らの有力国人が、毛利元就とも連絡し合って、大内義長による支配から独立しようという動きを見せ、徐々に無政府状態となつていった。弘治三年（二五五七）二月、野仲重兼・仲間弾正忠らは下毛郡の万代平城を攻め、城内への調略によって城督豊田対馬守鑑種を殺した（『友枝文書』）。このとき、大友氏は「御両家御一体」と称して兵を送り、野仲重兼を屈伏させたい。野仲重兼は五月、広津城に籠城して、山田隆朝勢を撃退している。また秋月文種は仲津郡に進出して馬ヶ岳を攻め、大内義長方の城督神代余三兵衛尉弘綱を降伏させ（『萩原文書』）、家臣の三奈木甲斐守・ヨシカイ某を城督として一〇〇人ほどに守備させた。

大内義長は毛利元就に赤間関まで追い詰められて、兄大友義鎮に救援を頼んだが、毛利氏と密契を結んでいる大友義鎮は動かず、弟義長を見殺しにした。その直後の四月六日、大友家加判衆臼杵鑑統は、佐田隆居に対し、宇佐郡の関所地について尋ね、引き続いて郡代の役目を命じて、豊前支配に乗り出した。

**山田隆朝の挙兵**

弘治三年五月十八日、山田安芸守隆朝・仲八屋備前守英信・如法寺・仲間らが城井左馬助正房の宅所へ押し寄せ、放火して退却した。城井衆との合戦で山田方は戦死一五、負

傷七〇余を出した。

『紀井宇都宮系図』では、城井正房は弘治三年七月五日、八十歳で没したという。城井衆との合戦のなか

月後の六月十八日広津治部大輔鎮頼の宅所（天仲寺山城）へ山田隆朝勢が押し寄せた。広津城には杉因幡守・佐田隆居・野仲兵庫頭重兼・福島安芸守ら下毛・宇佐郡衆が籠城して、これに備えていた。山田隆朝は、この数日、上毛郡の人々を動員し、同心しなければ、討ち果たし、その余は人質に取って猛威をふるった（『佐田文書』）。

六月十八日・十九日二日間の攻防で、山田勢は戦死一〇〇人、負傷二〇〇人余を出して退却した。この日宇佐郡に入った豊後国東郡の田原親宏が指揮する約四〇〇〇の軍勢は、六月二十日、上毛郡一帯に放火し、翌日、山田城を攻略した。山田隆朝は山中に消え、防州へ亡命した。生年十一歳の嫡子満千代丸は、下毛郡の秣刑郡に殺され、首を田原親宏から玖珠郡に動座していた大友義鎮のもとへ送られた。山田方の者八〇〇余が残党狩りによって首を取られ、女子も方々で略取され、上毛郡の男女四分の一が逃散などでないとなったという（『永弘文書』）。

### 秋月文種の討滅

弘治三年七月三日、田原親宏勢は仲津郡へ着陣し、四日、馬ヶ岳を一息に攻略し、城督以下一〇〇人ばかりの秋月衆を討ち取ったが、田原方も松木甲斐、萱嶋某などの家臣を失った。

今度、馬岳小城切岸において、最前より御放戦の趣、比類無く候、殊に小城調略の儀、御一人の御才覚、他に異なり候、御粉骨の次第、注進を遂ぐべく候、恐々謹言

「弘治参」七月九日

親宏（花押）

佐田彈正忠殿御陣所

（『佐田文書』、原文は漢文）

右の史料は、馬ヶ岳攻略の際、小城を調略によって切り崩したことを田原親宏が賞したものである。

田原親宏勢は、このあと田川郡から筑前馬見山へ進み、秋月文種が籠城する古処山を背後から攻めようとした。しかし、七月七日、古処山は家臣の中から裏切りが出て、豊後表陣衆を誘導したため、文種は敗死し、子息三人は防長へ逃れて、豊前・筑前は大友氏の支配するところとなった。

### 西郷隆頼の挙兵

秋月文種討滅後も、その残党とも目される人々の抵抗が続き、田原親宏は築城郡別府に陣を進め、小倉津の敵軍を討伐して別府に帰陣している。

永禄二年（一五五九）八月、西郷遠江守隆頼が挙兵した。毛

利元就の調略に応じたいらしい。田原親宏は、豊後速見・国東郡衆に宇佐・下毛郡衆を加えて、西郷隆頼の要害を攻略した。要害とは犀川町の不動ヶ岳のことであろうか（『豊前志』）。この戦いで、佐田隆居は、西郷隆頼の弟弥三以下四人の首を討ち取ったが、被官一八人を負傷させる激戦を演じた。

西郷隆頼は城を落ちて、毛利氏のもとへ亡命した（『西郷文書』）。このころ、門司城・花尾城（八幡西区）・香春岳城でも牢人が籠城していた。

九月二日、田原親宏は、佐田隆居と安心院興生を馬岳城番として残し、門司城・花尾城攻略に向かった。



大友府蘭



大友宗麟



大友宗麟



大友宗滴



圓齋（大友宗麟）  
ローマ字朱印



大友宗麟朱印  
（原寸大）

九月二十六日、門司城が陥落し、落ちゆく波多野大和守興滋父子や須子大蔵丞を討ち取り、怒留湯主水を門司城番として、豊後勢は帰国した。

波多野興滋は大内義長の奉行衆であったが、毛利元就の調略に応じて毛利方に降り、門司城督を務めていた。

こうして、大友義鎮の得意絶頂の時代が訪れた。大友義鎮は亡父義鑑に倣って、衰えて

### 大友義鎮の全盛

経済的に窮乏していた幕府要人へ献金を続け、豊後・肥後・肥前・筑後・豊前・筑前と

次々に守護職を手に入れ、大内家督の座や長門・周防の守護職まで与えられ、九州探題職に補任された。もつとも、防長は毛利氏の支配下にあったのであるから、幕府の毛利氏に対する牽制であった。毛利氏は、大友氏が防長へ渡海してくるのを恐れてか、間もなく、石見大森銀山を公方に献上して、周防・長門守護職に補任された。

## 二 大友氏と毛利氏の衝突

永祿三年（一五六〇）十二月、毛利元就は、仁保右衛門大夫隆慰を渡海させ、門司城を奪門司城争奪戦

回した。以後、仁保隆慰は永く豊前で活躍することになる。彼も大内義長の奉行衆であったが、毛利元就の調略に応じて、毛利方となり、弘治三、四年には奉行衆をも務めた。

門司城が奪取されると知らされた大友義鎮は、永祿四年正月、吉岡長増・白杵鑑速の二家老と田原親宏・志賀親度・朽網鑑康ら六国衆に一万五〇〇〇余の兵をもって、門司城奪回のため、豊前への出陣を命じた。